

#### 4 効果検証のまとめ

##### 4-1 利用目的

総利用者数 84 人の利用目的を表 1 に示す。

利用目的	人数
伸展運動の支援:手指の伸展が不十分なため、日常生活において物を把持するときに伸展補助を行う。また、拘縮予防(機能訓練)としての期待もある。	61人
屈曲運動の支援:手指の屈曲が不十分なため、日常生活において物を把持するときに屈曲補助を行う。また、機能訓練としての期待もある。	23人

表 1 利用目的

##### 4-2 利用終了理由

前述の図 1 より総利用者数 84 人、継続利用者数 9 人であり、利用を終了した 75 人の理由を図 7 に示す。

利用者・介助者の体調の変化による施設入所や市外転居といった環境の変化でやむを得ず終了したのは 23 人で全体の 31%に及ぶ。

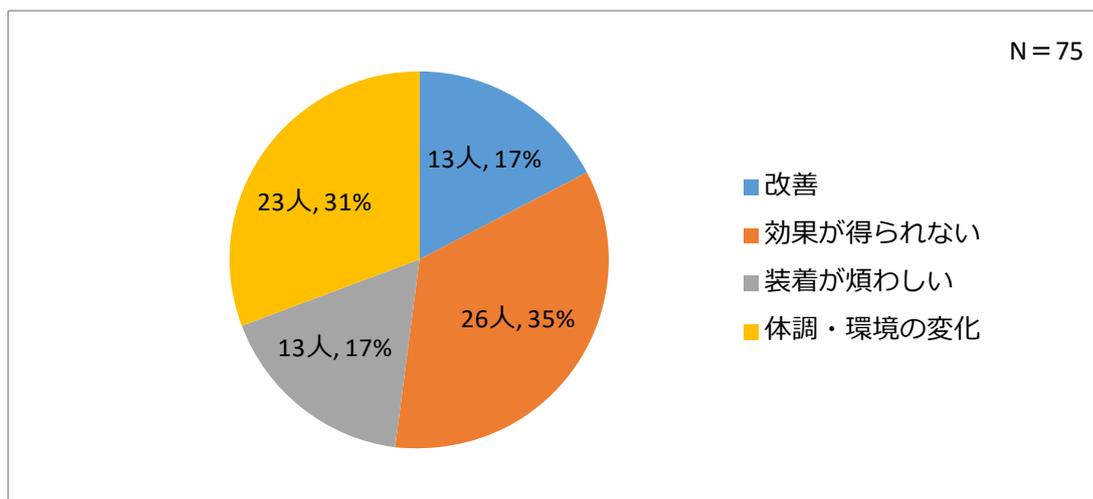


図 7 利用終了理由

#### 4-3 利用期間

体調や環境の変化によりやむを得ず終了した利用者を除く 61 人(継続利用者 9 人も含む)の利用期間別人数を図 8 に示す。6 ヶ月未満の利用者は 20 人(33%)で、6 ヶ月以上の利用者は 41 人(67%)、内 12 ヶ月以上の長期利用者は 22 人(36%)であった。

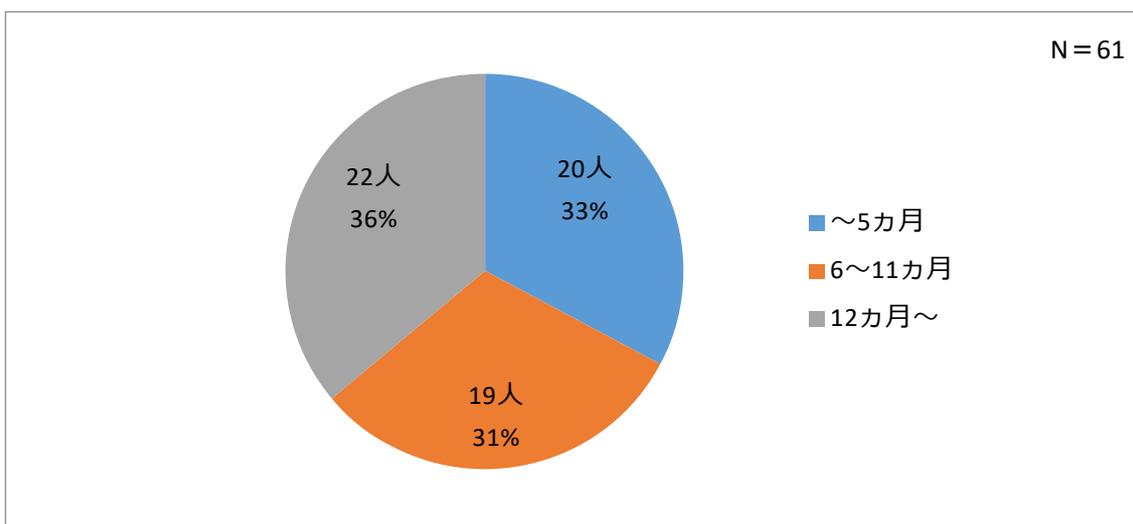
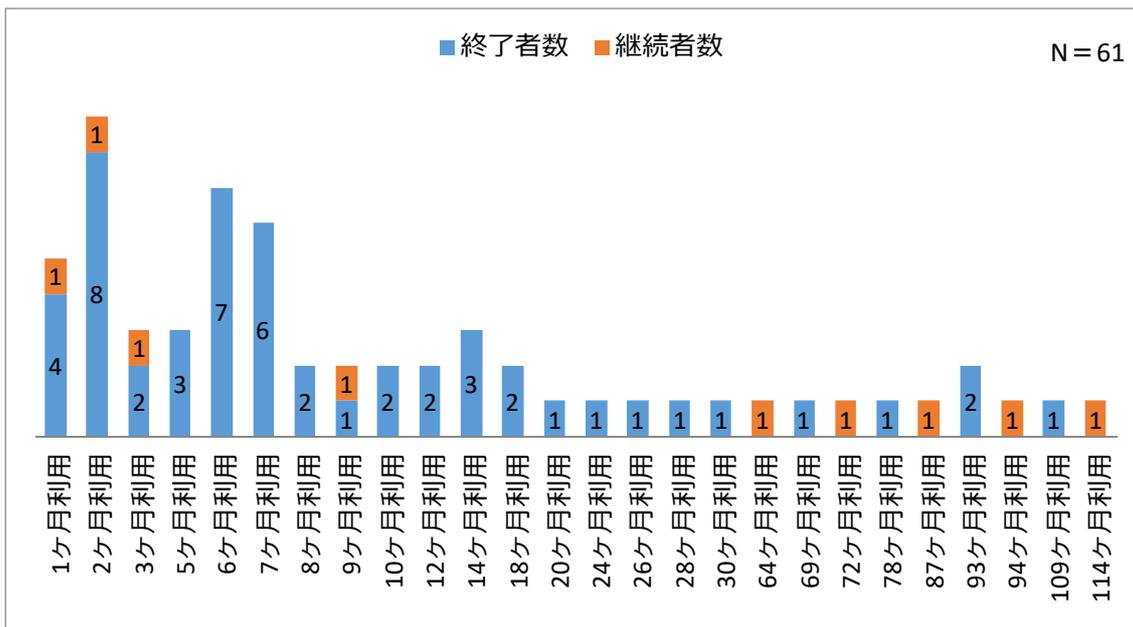
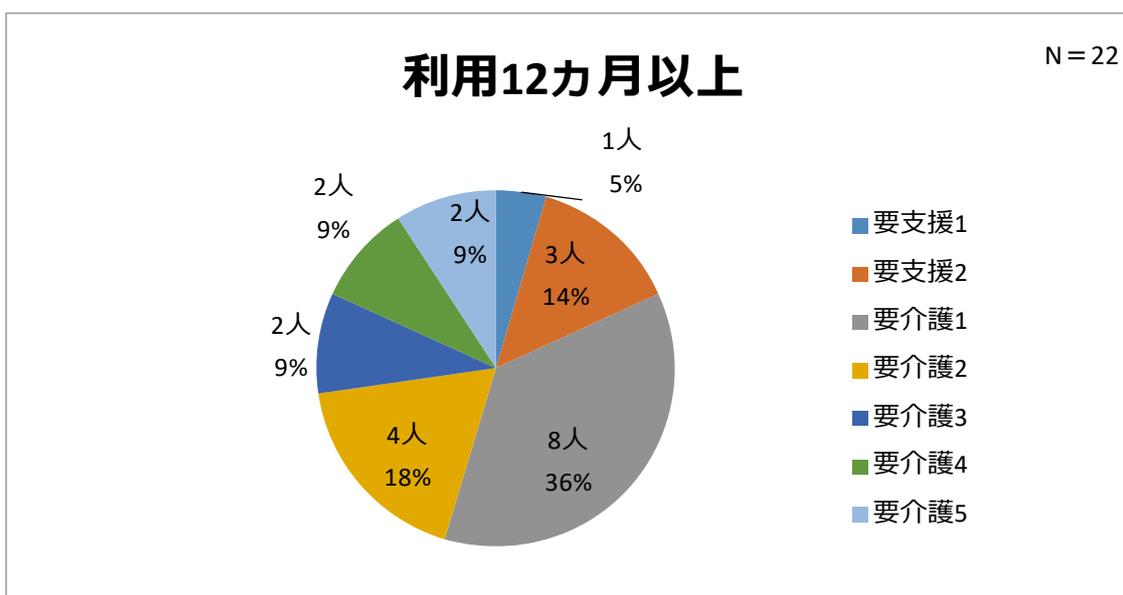
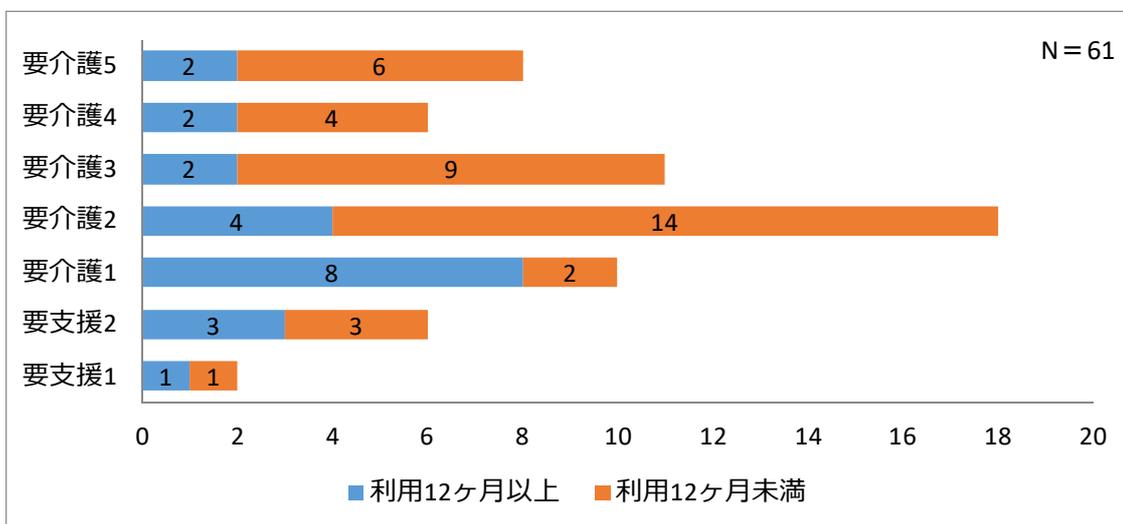


図 8 利用期間別人数

4-4 やむを得ず終了した利用者を除いた 12 ヶ月以上の長期利用者と短期利用者の傾向  
 ①要介護度別にみた利用人数を図 9 に示す。

要介護 2 までの利用者で 12 ヶ月以上利用されている人数が多い実態がわかる。この利用者層では、生活のための補助手として ADL 向上を目的に利用されているケースが多い。なお、介護度が低い要支援 1 では利用者数自体が少ない状況である。

一方で介護サービスの必要性が高い要介護度 4, 5 の利用者においても 12 ヶ月以上利用しているケースがあるが、この利用者層ではトレーニングや手のケアのために手指が柔らかい状態を維持したいという目的に利用されているケースが多い。



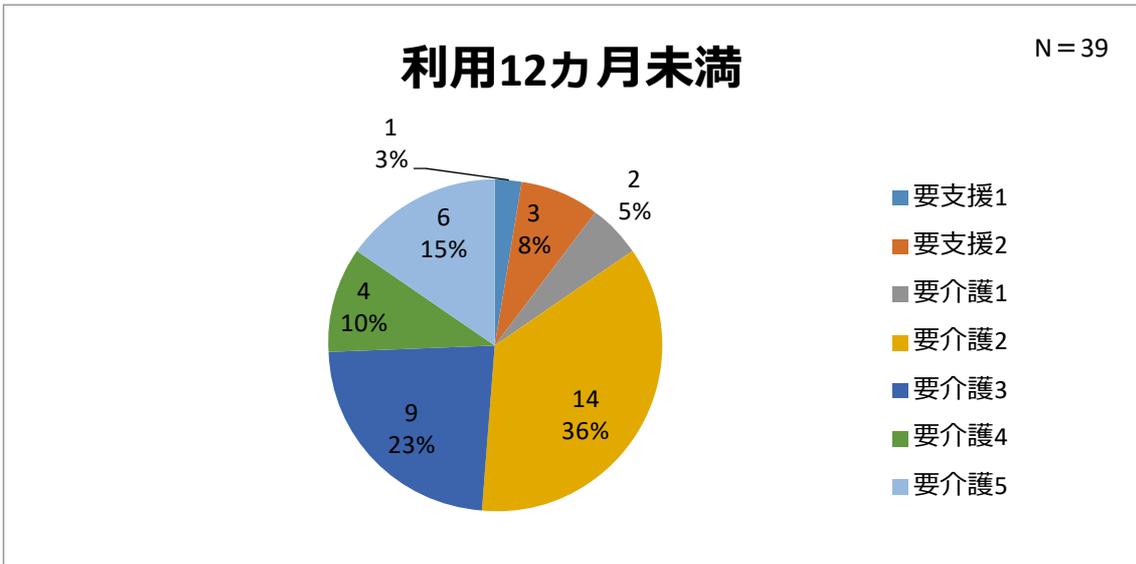
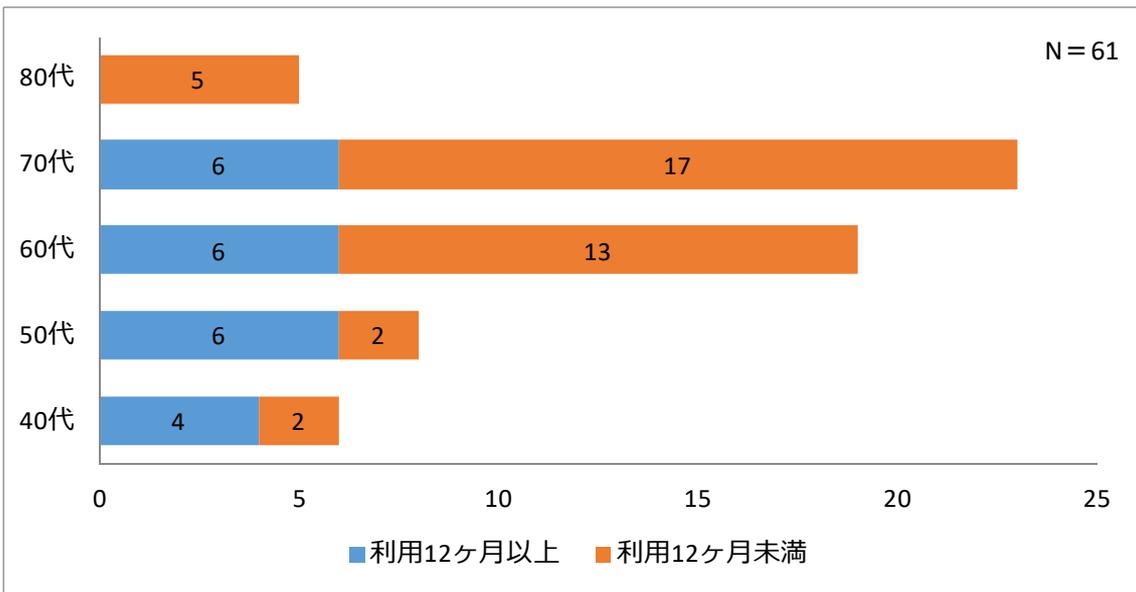


図 9 要介護度別利用人数

②年代別にみた利用人数を図 10 に示す。

高齢な 80 代は長期利用 12 カ月(1 年)を待たず解約している一方、40 代-50 代は長期利用される傾向がある。



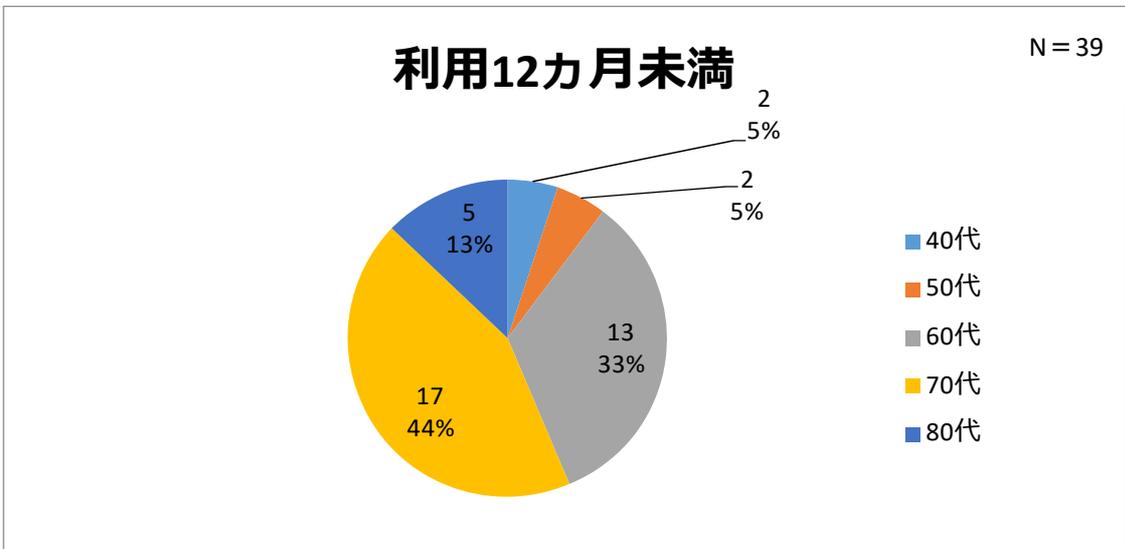
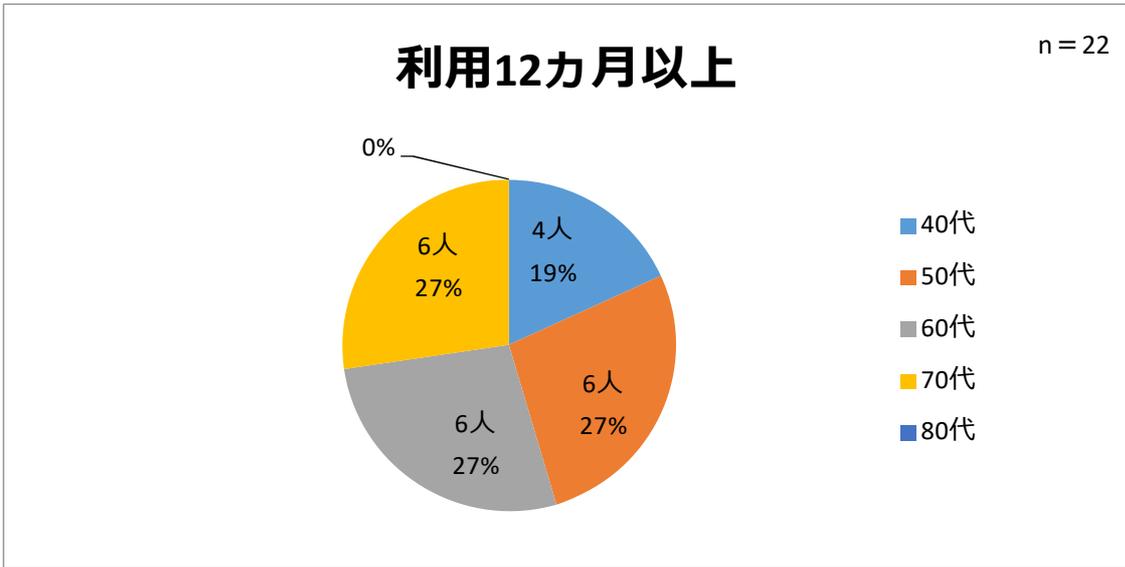


図 10 年代別利用人数

③男女別にみた利用人数を図 11 に示す。

利用者数が異なるものの、女性の方が男性と比較して利用期間が長い傾向がある。

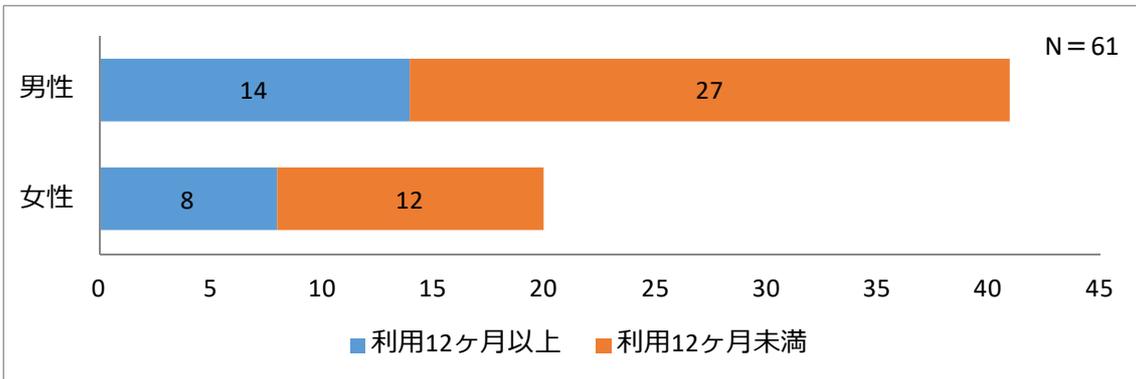


図 11 男女別利用人数

④利用者が患う疾患状態別にみた利用人数を図 12 に示す。  
 脳血管障害の利用者が 12 ヶ月以上利用される傾向がある。

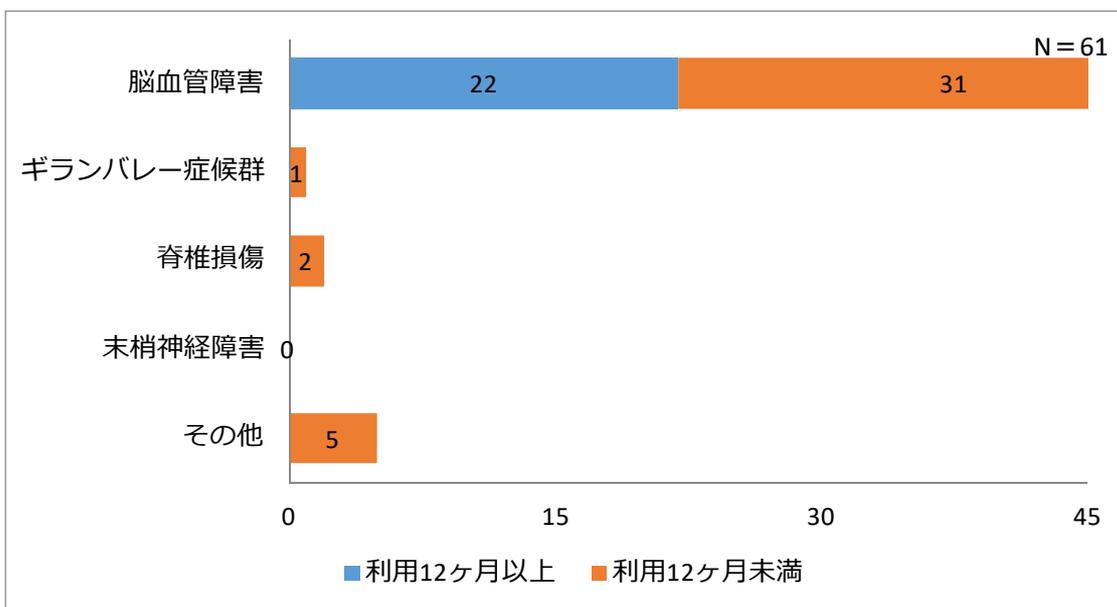


図 12 疾患状態別利用人数

⑤グローブのタイプ別利用人数を図 13 に示す。

伸展タイプの利用者が最も多い。手指の障害状態の傾向として、握り込みが強くなるケースが多く手指を伸ばすことが課題となっているケースが多い。握ることを補助するための自助具などはいくつかあるが、手指を伸ばすためのデバイスは市場に多くないためにこのような傾向が得られたと推察する。

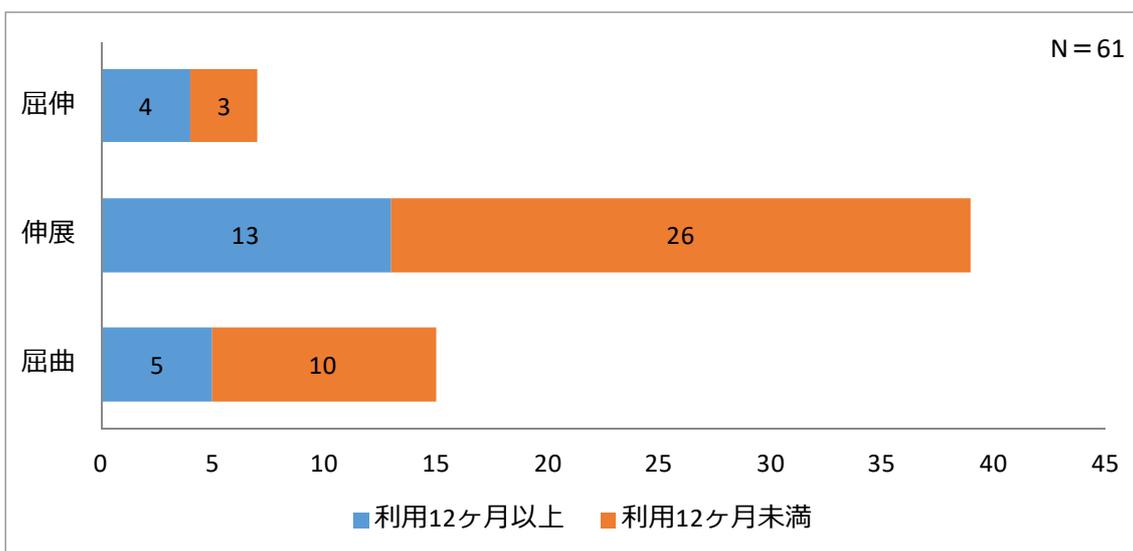


図 13 タイプ別利用人数

⑥終了理由別の利用人数を図 14 に示す。

なお、令和 6 年 3 月末時点での継続利用者が 9 人であるため 52 人の結果となる。「効果が得られない」「装着が煩わしい」という理由で終了した利用者の多数が 12 ヶ月未満で解約となった。

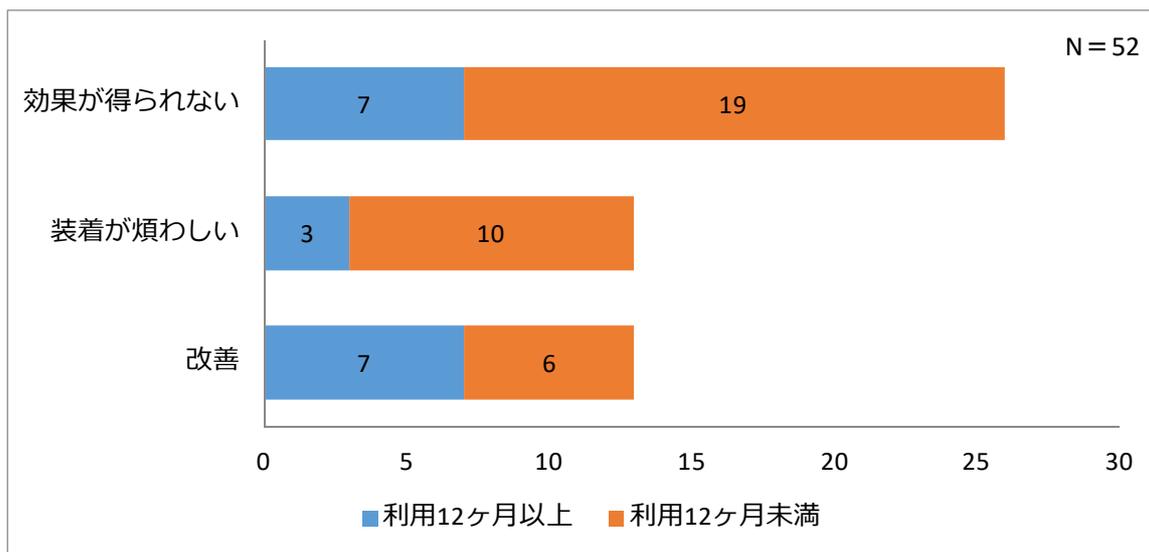


図 14 終了理由別利用人数

#### 4-5 ADL 評価

パワーアシストグローブの導入前と導入後での日常生活の変化を数値化したものを表 2 に示す。総利用者数 84 人中、新型コロナウイルスの影響により ADL 評価が実施できたのが 80 人であった。内、24 人(30%)に改善、53 名(66%)が維持、3 名(4%)が悪化という結果を図 15 に示す。

No.	ADL 評価 (導入前)	ADL 評価 (導入後)	前後差
1	0	0	0
2	26	23	-3
3	0	1	1
4	0	1	1
5	0	1	1
6	8	17	9
7	0	0	0
8	0	1	1
9	8	8	0
10	2	2	0
43	30	30	0
44	30	30	0
45	21	22	1
46	5	5	0
47	10	10	0
48	10	10	0
49	5	5	0
50	5	5	0
51	9	9	0
52	8	8	0

11	0	0	0	53	8	8	0
12	25	28	3	54	3	3	0
13	0	2	2	55	3	3	0
14	0	1	1	56	21	24	3
15	7	8	1	57	0	0	0
16	0	1	1	58	17	18	1
17	0	2	2	59	27	27	0
18	10	11	1	60	15	23	8
19	0	0	0	61	26	26	0
20	0	0	0	62	21	21	0
21	0	0	0	63	0	0	0
22	0	3	3	64	0	0	0
23	0	2	2	65	0	0	0
24	0	3	3	66	30	30	0
25	0	0	0	67	0	0	0
26	0	0	0	68	21	21	0
27	0	0	0	69	22	21	-1
28	0	2	2	70	16	16	0
29	0	0	0	71	16	16	0
30	0	0	0	72	24	24	0
31	29	29	0	73	0	0	0
32	0	0	0	74	0	0	0
33	18	18	0	75	※	※	※
34	27	28	1	76	※	※	※
35	0	0	0	77	※	※	※
36	0	0	0	78	23	23	0
37	23	23	0	79	6	7	1
38	27	28	1	80	9	6	-3
39	9	9	0	81	19	19	0
40	19	22	3	82	15	15	0
41	8	3	-5	83	15	15	0
42	17	17	0	84	18	18	0

表 2 ADL 評価表の集計

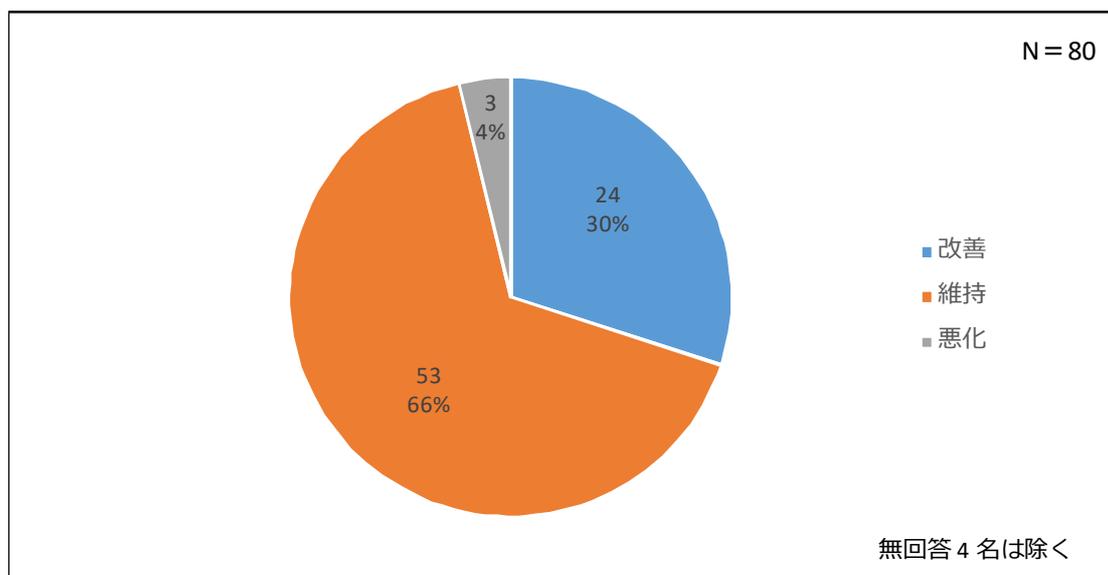


図 15 ADL 評価 改善・維持・悪化の割合

#### 4-6 手指伸展可動域評価

導入前と導入後での手指伸展可動域の変化を評価したものを表 3 に示す。総利用者数 84 人中、伸展可動域を計測可能であった利用者は 29 人であった。内、13 人に改善、8 人が維持という結果であった。一般的にはケアしなければ関節可動域が小さくなっていく傾向であるが、図 16 の通り約 72%の利用者に関節可動域の維持向上が見られた。

No.	手指伸展可動域(導入前)	手指伸展可動域(導入後)	前後差
2	完全伸展	完全伸展	同等
6	8	8	0
12	0	11	11
33	6.5	9	2.5
34	9.2	10.4	1.2
38	7.5	10	2.5
40	8.5	8	-0.5
42	5	3	-2
43	10	9.7	-0.3
44	9	8	-1
45	0	5	5
46	0	9	9
47	9	9	0
48	8	9	1
53	7	7	0

54	8	7	-1
55	7	3.5	-3.5
56	7.5	7	-0.5
58	6.5	5.5	-1
59	10	10.7	0.7
60	10.2	11	0.8
61	6.5	8	1.5
65	8.5	8.5	0
66	5	7.5	2.5
68	9	9.5	0.5
69	2.5	10.5	8
72	3.5	3.5	0
78	1.5	1.5	0
79	1.5	1.5	0

表 3 手指伸展可動域評価表の集計

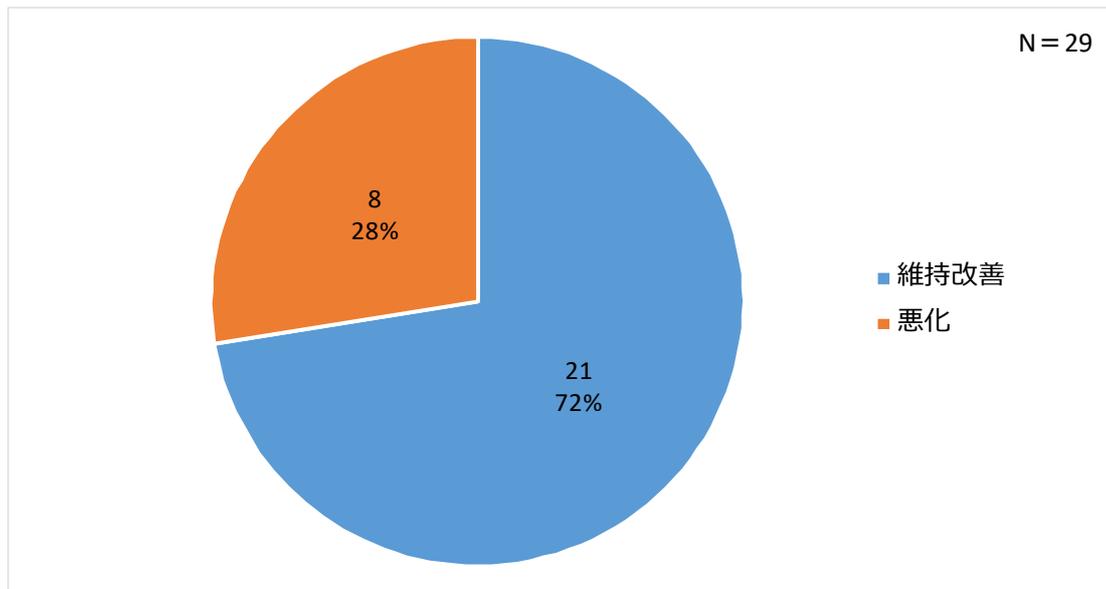


図 16 関節可動域 維持改善・悪化の割合

#### 4-7 利用者のヒアリング結果

ヒアリング調査で得られた継続利用で効果の見られる事例を以下に示す。

##### Aさん 男性 要介護1 脳血管障害

利用者の訪問看護のナースより、『爪切りの際にパワーアシストグローブを使用されていることで指が伸展し爪が切りやすい状態になっており、爪を切る時に重宝している』との意見があった。本人が爪を切ることを練習している。使用する目標が明確になっていることで意欲的に利用いただいております、良い変化が表れている。

##### Bさん 男性 要介護1 脳血管障害

パワーアシストグローブを1日1回の使用頻度で使用しており、右手の握力は以前までは14kgだったが、19kgまで向上したことで喜ばれている。これからも継続して使用していきたい。

##### Cさん 女性 要支援2 脳血管障害

パワーアシストグローブを毎日利用している。手指の握り込みが緩んでいるのを実感している。継続して使用していきたい。

##### Dさん 女性 要介護2 脳血管障害

パワーアシストグローブを使用して、リハビリを意欲的に実践している。フィンガーファンクションテストによる評価で親指の伸展が見られるようになった。そのおかげで日常作業として、封筒や袋などを親指で挟み固定して、はさみでカットすることが出来るようになってきた。

##### Eさん 女性 要介護2 脳血管障害

パワーアシストグローブ利用実施前は手指の進展が上手にできなかったが、繰り返し利用していくうちに拘縮が強かった4指、5指にも動きがみられるようになり、自分の意思で動かせる範囲が増えた。

##### Fさん 女性 要介護1 脳血管障害

病気直後は手指を思うように動かせなかったが、継続利用で手指の動きがスムーズになった。

##### Gさん 男性 要介護1 脳血管障害

以前は手指に紙を挟んでも落ちていたが、グローブの利用により薬の袋を挟んでも落とさず持てるようになった。また右腕全体も動くようになってきており、右手が以前に比べてしっかりと握れるようになった。

#### Hさん 男性 要介護1 脳血管障害

握力が徐々に向上しており、17kg から 20kg まで向上した。どんどん力もついてきているとリハビリに意欲的。

#### Iさん 男性 要介護1 脳血管障害

グローブの貸与前は紙を手で持とうと挟んでも落ちてしまっていたが、薬袋が持てるようになった。また趣味はゲームで継続使用の効果かコントローラが持てるようになった。

#### Jさん 女性 要介護4 その他

事故の後遺症により片麻痺を患っているが、リハビリの先生から『徒手ストレッチもしやすくなっている』とコメントいただいたことで本人はもちろんサポートしている家族も意欲が増した。

### 4-8 考察

#### ①パワーアシストグローブに適した利用者像

図9・10より、自身の残存機能でグローブが装着可能で機器の取扱いに難渋しない、自立度の高い若年層(40～50代)の利用者が意欲的な利用に取り組んでいると考えられる。また、表3 およびヒアリング結果から伸展タイプを使用することにより、手指可動域の改善や維持がみられている。さらに継続利用者を含め3年を超えて利用された事例が10件ある。利用者像としてケアをしなければ機能低下し続けるため、継続的に日常生活において実用手として麻痺手を使う、あるいはストレッチや訓練等を行う必要がある。パワーアシストグローブを利用することが麻痺手の継続的な使用動機につながり、活動レベルを維持していることがうかがえる。

以上より、パワーアシストグローブには機能訓練にも有効性が期待でき、若年層(40～50代)で、残存機能を使って自身でグローブを装着できると想定される介護度の低い片麻痺を患っている方がパワーアシストグローブに適した利用者像であると考えられる。

また、モニタリング時にいただいている意見として「音」の重要性を訴えられるケースが複数あった。パワーアシストグローブであれば吸排気の際の「プシュッシュー」という音、パワーアシストグローブ EX であれば駆動時のコントローラの振動音が該当する。利用者は手が不自由なため中には手の感覚があまりない方がおり、感覚でグローブの動作が感じられないため音で判断しているという声があった。機器としては動作の副産物である「音」であるが、機能性として考慮する必要性が明らかになった。それを裏付ける事例として、パワーアシストグローブ EX を利用された方から、動作スピードを速める方法はないかと問い合わせを受け、試供品として機構改変したサンプルを利用していただいたが、グローブ動作時の「音」のタイミングが変化したことで、使いにくさにつながったとの報告を受けている。

## ②パワーアシストグローブに不向きな利用者像

図 9・12 より、自立度が低く装着や操作自体が難しいと考えられる利用者の継続率が低く、また利用者数自体が少ないものの、脳血管障害以外の疾患を患っている方の継続率も低くなっている。さらに図 7・14 より、利用終了者の多くが一人で装着できないこと・介助者の手を煩わせてしまうことを利用中止する理由としてあげられている。実際にモニタリングで聞かれた意見として、家族に装着やメンテナンスをお願いすること自体がおっくうで、場合によってはそれがきっかけで喧嘩をしてしまうなど、実際に使用されてみなければわからなかった事情も伺うことができた。

以上より、介護度が高く、操作・装着自体が難しい方は、パワーアシストグローブの利用は慎重に判断すべきで導入時にメリットデメリットを細かくお伝えする必要があると考えられる。

## ③課題と対策

本製品は在宅において上記の利用者像の方に貸与することで、継続的な利用が見込め、ADLの改善や機能訓練に効果を発揮し、ケアプランの見直しにつながり、社会保障費の削減に寄与する可能性があると考えられるが、自立度が低い方には装着が難しいという課題を残している。パワーアシストグローブ EX は介助者が装着しやすい構造にして利用促進を図っているが、自分自身で装着したいという課題を解決するには至っていない。ただし、リハビリスタッフのサポート(装着の補助をしていただくこと)を要して導入に至り、利用者の意向を叶えられたケースもある。ケアマネージャーやリハビリスタッフ・ヘルパーの理解が得られれば、より多くの利用者の満足度向上につながるのではないかと考えている。

また、脳血管障害以外の疾患に対して疾患ごとの経過特性に合わせた使用方法やフォローアップについて手法を検討していく必要がある。

## 5 課題と今後の展開

モニタリングを通して長期にわたり利用されている方は、ご自身で装着、メンテナンスが可能な方や、周囲の手厚いフォローがあることがうかがえる。またそのような利用者は利用目的が明確になっており、ご自身で利用効果を理解しノートに書き留めているケースもみられている。さらに、利用者像としてケアをしなければ機能低下し続けるため、継続的に日常生活において実用手として麻痺手を使う、あるいはストレッチや訓練等を行う必要があり、パワーアシストグローブを利用することが麻痺手の継続的な使用動機につながり、活動レベルを維持していることがうかがえる。

一方、課題として多く上がっているのは「装着の簡易化」である。この課題に対して電源が必要なものの、装着がより簡易に行えて、ポンベの交換が不要なタイプの製品(パワーアシストグローブ EX)を投入している。徐々にこのタイプの利用者数が増えており、お引き合いの際に利用目的の詳細を確認したうえで適切な商品を案内している。

しかしながら、介助者がいない独居のケースや介助者がいても手を煩わせたくないというケースに応じるため、介護度が高い利用者でも一人で装着できるグローブ形状の検討が必要である。バリエーションが広がったパワーアシストグローブの利用を促進していくために、利用者一人一人の状態と環境に合わせた製品を事例とともに提案し、有効利用を促進していく。

そうした取り組みにおいて、上述のようにニーズに対応するために状況に応じて機構改変、装着性を向上させるために固定用バンドの提供等を行っている。またグローブの形状に対する要望は、事業当初から可能な限り生活実態と身体状況に合わせて適切な提案を行うよう心がけている。設計思想のノウハウを蓄積していくことで、必要な方に必要な製品サービスが提供できるよう推進していく。

添付資料

調査シート(平成 27 年 7 月まで使用)

PAG評価シート										検査者		
										評価日		
										年	月	日
基本情報												
氏名					性別	男・女	生年月日	年 月 日( 歳)				
疾患名 (障害名)					障害度 分類	(Brunnstrom Stage, Zancolliiの分類など)				利き手	右・左	
病歴	発症日	年 月 日		詳細	(医療機関からの情報, 要介護度など)							
	退院日	年 月 日										
ニーズ	(生活の中で困っていることやPAGの利用目的)											
主介護者												
評価												
認知機能	会話(本人)	良・不良		特記事項								
	PAGの操作理解(本人)	良・不良		PAGの操作理解(主介護者)	良・不良							
上肢機能	握力	右			kg	左			kg			
	ピンチ力	右			kg	左			kg			
	他動一関節可動域 (著明な制限があれば、 記入する)	右	肩					左	肩			
			肘						肘			
			手首						手首			
手指							手指					
評価	上肢機能評価	0			ADL評価	0						
結果												
PAG可否	採用 (継続)	→	グローブ詳細	右・左	握る・開く	その他						
	不採用 (中断)	→	理由									
問題点	①				②				③			
コメント												

上肢機能評価表		チェック	得点			
腕	① 膝上に手を置く	不可	0	0		
		同側の膝上に手を置ける	1	0		
		対側の膝に手が届く	2	0		
	② 前腕の回内/回外 (膝上で手をばたばたさせる)	不可	0	0		
		肘を体につけて90° 曲げた状態で可能	1	0		
		肘を伸ばした状態で可能	2	0		
	③ 後頭部に手を伸ばす	不可	0	0		
		へそから胸部まで	1	0		
		胸部より高く上がる	2	0		
		手が頭部に届く	3	0		
		手掌がぴったりつく	4	0		
	④ 腰に手を回す	不可	0	0		
		側面(上前腸骨棘)に届く	1	0		
		同側臀部に届く	2	0		
		脊柱に届く	3	0		
		手掌がぴったりつく	4	0		
	⑤ 上肢の前方挙上 (前から手を上げる, 肘は伸展位)	不可	0	0		
		0° ~ 45°	1	0		
45° ~ 90°		2	0			
90° ~ 135°		3	0			
135° ~		4	0			
⑥ 上肢の側方挙上 (横から手を上げる, 肘は伸展位)	不可	0	0			
	0° ~ 45°	1	0			
	45° ~ 90°	2	0			
	90° ~ 135°	3	0			
	135° ~	4	0			
			小計(腕)	0 / 20		
手指	① 手関節の掌屈/背屈 (手をうちわのようにして扇ぐ)	不可	0	0		
		少し動く程度(ROMの1/4)	1	0		
		やや動く(ROMの3/4)	2	0		
		全可動域で可能	3	0		
		背屈位で保持できる	4	0		
	② 手指の集団屈曲, 集団伸展 (グーバーグーバー)	不可	0	0		
		屈曲可能(不十分)	1	0		
		(十分)	2	0		
		伸展可能(不十分)	3	0		
		(十分)	4	0		
	③ 手指の分離運動 (母指→小指で屈曲, 小指→母指で伸展)	不可	0	0		
		伸展可能(不十分)	1	0		
		(十分)	2	0		
		手関節軽度背屈位で伸展可能(不十分)	3	0		
				伸展可能(十分)	4	0
	④ 横つまみ (親指の先と人差し指の横でつまむ)	不可	0	0		
		鉛筆 保持可能(弱い力で引き抜かれる)	1	0		
		鉛筆 抵抗に抗して可能(書字可能)	2	0		
		紙 保持可能	3	0		
	⑤ 筒握り(ペン) or 球握り	不可	0	0		
		筒握り 保持可能(弱い力で引き抜かれる)	1	0		
		抵抗に抗して可能(食事可能)	2	0		
		ボールを握っている	1	0		
		離す	2	0		
			つかみあげる	3	0	
⑥ 指腹つまみ (親指の先と人差し指の先でつまむ)	不可	0	0			
	鉛筆をつまみあげる	1	0			
	コインをつまみあげる	2	0			
			小計(手指)	0 / 22		
合計得点			0 / 42			
ADL評価表						
① 食事	不可(全介助)	お椀やコップをつかむ(補助手)	1	0		
		スプーンやフォークを握って食べる	2	0		
		全く困難なく食事ができる(時間)	3	0		
		なんとか読解可能な文字が書ける	1	0		
	② 書字	丁寧で読みやすい字が書ける	2	0		
		全く困難なく書字ができる(時間)	3	0		
		不可(全介助)	0	0		
	③ 整容	ドライヤーやシェーバーなどを使用する	1	0		
		コップや歯ブラシ等道具を持ち替えて整容できる	2	0		
		全く困難なく身だしなみを整えられる(時間)	3	0		
	④ 家事(掃除, 料理など)	不可(全介助)	0	0		
		やや制限される(中等度介助)	1	0		
		わずかに制限される(最小介助, 見守り)	2	0		
		全く困難なく家事ができる(時間)	3	0		
	⑤ 趣味, その他	不可(全介助)	0	0		
		やや制限される(中等度介助)	1	0		
		全く困難なく趣味ができる(時間)	2	0		
	合計得点			0		

調査シート(平成 27 年 8 月から使用)

PAG モニタリングシート 【経過確認用紙】

実施日	年 月 日 時 頃
担当者 (所属)	
次回 予定日	年 月 日 時 頃

○基本情報

フリガナ 氏名		利用目的と 評価項目	<input type="checkbox"/> 手指可動域の維持・改善	→ テスト 1.2
利用開始	年 月 ~ ( 月 日)		<input type="checkbox"/> 上肢/手指の筋力維持・改善	→ テスト 2.3
			<input type="checkbox"/> ADLの拡大	→ テスト 5-7
			<input type="checkbox"/> 趣味や仕事での利用	→ テスト 8-10
			<input type="checkbox"/> その他	→ 要相談

※テスト4(ステフ)は3カ月に1回計測

○介護環境 (変更があれば記入)

要介護度	要支援/要介護	認定期間	~	家族構成 (主介護者に○)
支援事業所		担当 ケアマネジャー		
介護サービスの 利用状況 (時間/頻度)		福祉用具の 利用状況 (購入/レンタル)		
その他 (特記事項)				

○評価 (利用目的に対応する評価項目を実施し記入)

上肢機能	1. 手指可動域		2. フィンガー・ ファンクションテスト	3. ニー・マウス テスト	4. ステフ			
	患側のみ	右/左			PAGなし	PAGあり		
		cm	cm		秒	秒		
A D L	5. 買い物袋やかばんを持ち運ぶ			<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
	6. 身だしなみを整える			<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
	7. 食事をする			<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
	8. 趣味・仕事をする( )			<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
	9. 趣味や仕事が自分の思うようにできますか			<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1
	10. 障害が家族や友人との社会生活を妨げることがありますか			<input type="checkbox"/> 5	<input type="checkbox"/> 4	<input type="checkbox"/> 3	<input type="checkbox"/> 2	<input type="checkbox"/> 1

○確認事項

<input type="checkbox"/> 継続		<input type="checkbox"/> 中断		
利用ポンベ	点検結果	理由	〈詳細〉	
本	問題なし / 問題あり			
総合評価				
<input type="checkbox"/> 5:非常に満足	<input type="checkbox"/> 4:やや満足	<input type="checkbox"/> 3:どちらでもない	<input type="checkbox"/> 2:やや不満	<input type="checkbox"/> 1:非常に不満
〈コメント〉改善された点や問題点、目的とその達成度合い、要望などの詳細を記入する。				

以上、利用後の訪問確認を行ったので報告します。 年 月 日

作成者 \_\_\_\_\_ 事業所 \_\_\_\_\_ TEL \_\_\_\_\_

○評価方法詳細

上肢機能					
1. 手指可動域			屈曲	伸展	
<p>人さし指の指先から、その根元の手のひらのしわまでの距離を測ります。 最大まで曲げた時(屈曲)、最大まで伸ばした時(伸展)の長さを測ります。</p>		右	cm	cm	
		左	cm	cm	
2. finger-function test (フィンガー・ファンクションテスト)					
<p>手指の運動(親指→小指の順に曲げる、小指→親指の順に伸ばす)を行います。 手指が屈曲している状態のときは、検者が指を伸ばしたあとの動きを評価します。</p>	<p>0: 全く動かない 1-A: 同時に曲げることがわずかに可能 -B: 同時に伸ばすことがわずかに可能 -C: 一部の指で曲げ伸ばしが可能 2: 順番に曲げ伸ばしがわずかに可能 3: 課題可能、著明なごちなさあり 4: 課題可能、軽度のごちなさあり 5: 麻痺なし(正常)</p>	右			
		左			
3. knee-mouth test (ニー・マウステスト)					
<p>座位において手を反対の膝(または太もも)から挙げ、手を口まで運びます。このとき、肘は肩の高さまで上げるよう指示します。そして膝に戻します。</p>	<p>0: 全く動かない 1: 肩がわずかに動くが、手が胸まで届かない 2: 肩肘の動きがあるが、手が口に届かない あるいは膝(または太もも)に戻せない あるいは肘上げが不十分 3: 課題可能、著明なごちなさあり 4: 課題可能、軽度のごちなさあり 5: 麻痺なし(正常)</p>	右			
		左			
4. STEF(ステフ)			PAG なし	PAG あり	
<p>〈右手で測定する場合〉 図のようにボールを右枠内に配置し、右手を真ん中に置きます。「用意・ハイ」の合図でボールを左枠内に移動していき、すべてのボールを移動するのに要した時間を測定します。 左手で計測する場合は、左枠内に配置した状態から右枠へ移動させます。</p>	<p>スタート位置</p>	<p>移動方向</p>	右	秒	秒
				左	秒

【準備】 直径7cm程度のゴムボール(5個)と29cm×13cmのトレー(2つ)を用意し、トレーを42cm離して置く。

【注意点】 患側のPAGなし/ありの2条件を評価する。

ボールを握ることが困難な場合(テスト2で1以下)や、移動させることが困難な場合(テスト3で1以下)は測定不可とする。

ADL

ADL評価は、利用者の日常生活における上肢の能力についてお聞きするものです。それぞれの質問に対して、最近1週間ほどの状態に当てはまるものに○をつけて答えて下さい。各動作を行うにあたって、左右どちらかの手あるいは両手を使ったかは関係ありません。利用者がどの程度できるか、あるいは普段しているかに○をして下さい。 ※PAGを使用した状態で評価を行います。

回答は (ご本人 / 主介護者)	介助者なし		介助者あり		
5. 買い物袋やかばんを持ち運ぶ	5: 全く困難なし(自立)	4: やや困難	3: 中程度困難(見守り～軽介助)	2: かなり困難	1: 全くできない(全介助)
6. 身だしなみを整える	5: 全く困難なし(自立)	4: やや困難	3: 中程度困難(見守り～軽介助)	2: かなり困難	1: 全くできない(全介助)
7. 食事をする	5: 全く困難なし(自立)	4: やや困難	3: 中程度困難(見守り～軽介助)	2: かなり困難	1: 全くできない(全介助)
8. 趣味・仕事をする( )	5: 全く困難なし(自立)	4: やや困難	3: 中程度困難(見守り～軽介助)	2: かなり困難	1: 全くできない(全介助)
9. 趣味や仕事が自分の思うようにできますか	5: できる	4: やや困難	3: 中程度困難	2: かなり困難	1: 全くできない
10. 障害が家族や友人との社会生活を妨げることがありますか	5: 全くない	4: ややある	3: ときどきある	2: かなりある	1: いつもある